

平成 25 年 3 月 21 日

「フィールドワーク」科研会議 第6回

(基盤研究(A) フィールドワーク方法論の体系化 - データの取得・分析・流通に関する研究 -)

松井 圭介

## H24～25年度 研究課題と進捗状況 (2)

### 1) 本年度の関連業績

(口頭発表)

人文地理談話会、2月21日、筑波大学

2013年日本地理学会春季学術大会、3月29日、立正大学

(論文ほか)

卯田卓矢・益田理広・金錦・細谷美紀・久保倫子・松井圭介 (2013) : 入善町道市地区における浄土真宗の候組織の構造と維持要因 : 地区の社会構造に着目して. 人文地理学研究, 33, 67-86.

松井圭介 (2013) : 『観光戦略としての宗教 - 長崎の教会群と場所の商品化 - 』丸善出版, 182頁.

### 2) 研究課題

松井の担当分担

H22～23 : A 「データの取得と管理」 : 先行研究の探索

H23～24 : C 「データベースの構築」 : データベースの構築と利用環境の整備促進

H24～25 : D 「データベースの高度利用, 公開と流通」 : 研究・教育への活用実験

### 3) 研究のテーマとねらい

#### 大学院教育におけるフィールドワーク教育の実践と体系化

「筑波大学人文地理学研究室において実施されてきた野外実験の実践にかかわる暗黙知のホワイトボックス化を図ることを通して, フィールドワークの実践と教育に関する知を構築する。具体的には, 「人文地理学野外実験」(大学院) および「文化地理学野外演習」「実験実習」(比較文化学類) など, これまでに自分が直接参加してきたフィールドワークにかかわる研究・教育活動のテキスト化を図る。」

(方法)

#### (1) フィールドワークの実施方法にかかわる可視化

事前準備, 現地での指導, 事後処理, 報告書作成等のマネジメントにかかわる部分に関して, テキスト化を図る。

#### (2) フィールドワークの実践(野外実験)にかかわる可視化

「地域調査報告/地域研究年報」をテキストとし, 研究テーマ(目的)とフィールドワークの実践(実施方法や調査項目, 聞き取り票やアンケート票など)および成果の表現(論文構成)や分析結果を整理する。

→ 何を調査・記述し, 何を明らかにしてきたのか。

→ 共通する事象と変化する事象。

### (3) 筑波（大塚）のフィールドワークの検証

豊富なフィールドワーク経験をもつ研究室の先達への聞き取りを通して、フィールドワーク方法論からみた筑波（大塚）流の人文地理学史を検討する。

#### 4) 談話会での発表を受けて（メモ）

\*フィールドワーク教育の体系化・強化について

筑波大学移転後

教育大時代：制度としての野外実験（成果をまとめず）

↓

「地域調査報告」等の作成によるフィールドワークの可視化・制度化

山本正三・高橋伸夫・石井英也・田林 明 らの貢献

\*課題に付け加えて

大学院における野外実験の意義

⇒地理学者の養成（スキル・技能／場所を理解する方法）

↓

（しかし）「地域調査」シンドローム：

地域の記載（記述）に終わってしまうことへの危惧。

時間的余裕のなさ（大学院教育をめぐる環境）

個人の能力差の拡大

社会貢献と野外実験

⇒当然、広義での社会貢献を無視して野外実験を遂行することは不可能。

↓

（しかし）それが目的ではない。

成果の還元 地域資料を集めること。

（調査内容を）論文としてまとめること。

成果を発表すること・ etc.

↓

（しかし）目的は「地理学者としてのトレーニング」

基礎なくして応用なし／土台なくして家立たず

フィールドワークの訓練を受けていれば、後はその後の発想・モチベーションで応用（社会貢献にかかわる研究）は可能

→訓練は若いうちでないとダメ。

→ディシプリン教育の重要さ（学際教育の危うさ）。

3分野の連携と住み分けが重要

共同調査（地誌的な調査）、個人調査（系統的な調査）、

スキル・応用・実学的な思考